

学校教育講座 片岡 弘勝 教授

主体的学習とその環境条件としての
地域概念の研究

キーワード 主体性 / 地域の力 / 上原専祿

どのような研究をなぜ行っているか

学習活動における「主体性」は、教育実践・理論研究のキーワードです。

本研究は、「生活現実の歴史化的認識」や「課題化的認識」等の独創的な提起により教育実践・理論に著しく大きな影響を与えた上原専祿（1899-1975年）の思想研究を深めることによって、下記のような有意な発想があり得ることを解明してきました。

- ① 主体的学習の方法である「生活現実の歴史化的認識」には、次記する学習者による二段の価値づけが必要です。地域の歴史的「形成」過程を内在的に（外部の価値観ではなく）対象化する作業と、その「形成」過程に対する批判的吟味を介した主体的方向づけの作業。
- ② 後者では、学習者が自らの主観の中で地域の「死者」（例＝戦争、公害、医療過誤等の被害者）との対話を重ね、「死者のメディア」となって価値観を確かめる行為が起点となります。「死者からの切迫と有責性」を引き受けた「生者」にこそ、強い「主体性」が形成され、学習の強い起動力となります。
- ③ 以上は、社会教育に適用され得る発想ですが、学校教育や「地域の教育力」とも関連します。その理由は、子ども・成人の主体的な学習活動と自立志向の地域づくりとは強く連動しているからです。
- ④ 子ども・成人の主体的な学習活動を生み出す「地域」の要素として次記の4点が挙げられます。A 自然村的秩序のもつ内発的エネルギーの存在と再生産、B「中央」勢力圏に対する経済・政治・文化の自立志向、C 生活・生産圏の異心円的複合構造（曼荼羅的世界観）、D 個人志向と集団志向の動態性（ダイナミクス）を生み出す緊張力学の存在。
- ⑤ 前記した①②の要件を備え、④の「地域の力」と連動することによって、何者かによる思想（思考）操作に「惑溺」することのない、同操作作用に対する「免疫力」を持つ「主体性」が生まれます。

以上の①～⑤は、今日問われている家庭・学校・地域の連携協力および「地域に根ざす学校教育」のあり方を検証する上で有意な視点を提供していると考えています。

研究成果をどのように活用し、どのような貢献ができるか

前記した研究成果は、何者かによる思想（思考）操作に「惑溺」することのない、同操作作用に対する「免疫力」を持つ「主体性」を形成する上で、あるいは検証する上で有意な視点を提供している、と考えています。この知見を拙稿論文や学会発表で公表することにとどまらず、大学授業、研究会、社会教育主事講習等を含む講習会・研修会で伝えることにより、「主体性」を尊重しようとする教育実践の展開に後掲できる、と考えています。

これまでの連携研究や社会貢献活動の実績

前記した知見の一部については、次記する講習会の内容に反映させました。

○奈良教育大学主催の教員免許状更新講習（選択領域「グローバル化社会における市民性教育の動向と課題」）のうち小テーマ③「グローバル化社会における『地域の教育力』」＋小テーマ④「『地域－日本－世界の現実を串刺しにする認識・学習』を考える」（2016年8月19日および2018年8月16日）